

目 次

はじめに	vii
第 1 章 外国語学習動機づけ理論と日本人学習者	1
外国語学習動機づけとは	2
社会教育モデル	3
L2 セルフシステム理論	6
自己決定理論における内発的動機づけ	8
L2 セルフシステム理論・内発的動機づけと日本人学習者	12
動機づけにおける“persistence”の重要性	14
LOTE 学習動機づけ研究の急増	17
LOTE 学習動機づけ先行研究の傾向	20
日本発の LOTE 学習動機づけ研究不足の背景	30
日本人学習者の LOTE 学習動機づけ先行研究	32
先行研究からみた本研究の位置づけ	36
第 2 章 研究デザイン	39
ユズルとシオンについて	39
インタビューについて	40
データ収集の流れ	42
データ分析	44
縦断的ケーススタディについて	46
第 3 章 初期の頃～ラジオ講座での英語学習～	49
実証研究の出発点	49
放送を通じた英語の自主学習	52

ユズルの集中的な学習	55
ユズルの半年後の変化	59
大学以降につながるユズルの多言語に対する姿勢	61
シオンの4年を超えるラジオ講座での英語学習	62
シオンの学習継続を支えた英語学習動機づけ	64
シオンの英語コミュニケーションの機会	66
研究課題についての考察	66
2人のラジオ講座での英語学習の様子から学べること	70
高校時代の2人を振り返って	71
 第4章 第二外国語学習の(再)スタート	73
ユズルの多言語学習	75
ユズルのイギリスでの経験と L2 理想自己	78
シオンの多言語学習	82
シオンの L2 理想自己と進路選択	85
研究課題についての考察	87
2人の多言語学習から学べること	90
大学学部前半の2人を振り返って	92
 第5章 日本で大学生が外国語を学ぶということ	93
フランスへの交換留学、そして留学前後のユズルの多言語学習	95
ユズルの職業関連の理想自己と L2 理想自己	99
言語自体に対する興味と言語・文化の関係に対する ユズルの見方	100
シオンの専門分野での集中的な学習・実習と外国語学習	104
シオンの外国語学習動機づけの変化	105
LOTE 学習に対するシオンの見方	108

研究課題についての考察	110
2 人の専門分野での学習から学べること	114
大学学部後半の 2 人を振り返って	115

第 6 章 人はなぜ言語を学ぶのか

～教育機関における外国語学習を超えて～	117
ユズルのその後の多言語学習	119
進路変更と多言語学習の動機づけ	122
ユズルにとって言語や言語学習が意味するところ	127
シオンのその後の外国語学習と外国語使用	129
教育機関での学びを終えていくシオンと彼女の外国語学習の 動機づけ	132
シオンにとって言語や言語学習が意味するところ	137
研究課題についての考察	139
日本で多言語を学ぶということとその動機づけ	141
2 人の自己分析から学べること	144
研究最後の 3 年間の 2 人を振り返って	144

第 7 章 人間としての研究者

～原著執筆を決心してから考えたこと～	147
ユズルの死がもたらしたもの	147
乏しい先行研究の中で	148
原著執筆開始前からつけていた日記の存在	151
日記からたどる自分自身の心理的変遷	154
原著であとがきを書いた意味	170
原著の表紙について	170
研究終了後もリフレクシブであること	171
省察性の 3 側面について	173

研究者が自らの感情に向き合うということ	175
人間としての研究者が人間についての研究を行うということ	175
第 8 章 結び～ 2 人の多言語学習者が教えてくれたこと～	177
2 人の 9 年間の変化	178
日本発の多言語学習動機づけ研究が理論的に示唆するところ	185
今後の研究の可能性	190
言語をこれから学習しようとする人に	191
人はなぜ言語を学ぶのか	194
 あとがき	195
 参考文献	197
 付録 用語解説	214
 索引	216

はじめに

本書は、2人の素晴らしい日本人多言語学習者の9年の記録である。同時に本書は、そのうち1人の、研究終了後の突然の死に向き合おうとした自分の記録でもある。英語が事実上の共通語として機能する時代、国内外の多くの外国語学習者が英語をコミュニケーションの手段としてのみ捉え、英語以外の外国語学習の意味を見出せない中、2人の学習者は、9年間にわたる成長や葛藤を通して、多言語学習の素晴らしさを教えてくれた。そのような2人の学習者について、2022年暮れに、イギリスの出版社、Multilingual Matters から *Motivation to Learn Multiple Languages in Japan: A Longitudinal Perspective* (以下、「原著」とする) を出版した。本書は、その原著に基づいたものである。2人の素晴らしい学習者の記録を執筆し終わった直後、まだ原著が出版の日の目を見る前に、私は、そのうち1人のあまりにも早すぎる死に向き合うことになった。研究者としての私は、心理的にもがきながら、自分が果たせる役割とは何かを考え続けてきた。そして思い立ったのが、彼らの思考、葛藤、成長を日本語で伝えようとする本書である。

2022年5月に亡くなってしまったユズル(本人が考えてくれた仮名)は、英語で言うところの“exceptional learner”(例外的な学習者)という表現がぴったりの、素晴らしい言語学習者であった。研究を行った9年間で、英語を含めて合計9か国語を勉強することとなり、大学在学中には奨学金を得てフランスに1年間交換留学、研究終了時点でちょうど大学院修士課程を終えて就職する頃ということで、将来が本当に楽しみな若者だった。高校2年の彼に初めて会ったときから、その高い言語能力は日本語でも顕著だった。インタビューを重ねるたびに、学習している言語は増え続け、毎回のインタビューではその成長ぶりを知るのが本当に楽しみだった。また、インタビューではいつも、言語や人間性に対するその鋭くも温かい視線に驚嘆するばかりであった。そのような若者の訃報に触れたのは、原稿を書き終え、彼自身の原稿チェック(専門用語では member-checking などと言い、データに対する研究者のゆがんだ解釈を避けるため、協力者にお願いすることがよ

くある)も終わっていた時期のことであった。その日はしとしとと雨の降り続く日で、その雨の中、あまりの衝撃、悲しみに、私は茫然とし、泣き続けた。この日のことは、細部にわたり、一生忘れることができない。

研究者が研究協力者から影響を受けることもあるということは、原著を書く前から感じていたことだった。9年間のデータ収集中、もう1人の協力者、シオン(同じく彼女自身が考えてくれた仮名)とユズルの、対照的であると同時に共通点もある多言語学習の様子から、研究の方向性も影響を受け、私自身の研究の興味も広がっていったとは感じていた。しかし、研究協力者からの影響は、このような心理的な形でもありえることを否応なく知ることとなった。ユズルの訃報に接してからは、しばらくの間、自分自身の原稿を手にとることもつらくなり、心理的にも落ち込む日々が続いた。

その後、ユズルのご家族と連絡をとるにつれ、貴重なインタビュー内容は、日本語でも読める状態にすることが自分の責務ではないかと考えるようになった。また、原著のシリーズ編集者の1人から、“you have given them eternal voice through your book”(本を通してあなたは彼らに永遠の声を授けたの)と言われたことも、私の心を大きく揺さぶった。偶然と言える形で2人の協力者に会い、9年もの間研究に協力してもらった恩を返すために、自分に何ができるのかを問うた。その結果、「日本語でも書かなければ」という決心をすることになった。

原著の出版直後から、「日本語で読んでみたい」という声を様々な方面からいただけてきたことも、私の背中を押してくれた。研究を最初の本にまとめるとき、私の頭にあったのは、「2人のような素晴らしい日本人学習者について世界中の人に知ってもらいたい」という希望であり、それゆえ、日本語ではなく英語で、イギリスの出版社から出版した。しかし、研究者、研究者以外含めて、様々な人とこの本について話をするうちに、2人の存在は外国語学習が多くの場合簡単には進まない日本人学習者にこそ、大きな励みとなるのではないかと考えるようになった。またそもそも、もともとのインタビューはインタビュー協力者、インタビュー実施者(私自身)双方の母語である日本語で行ったものであり、彼らの生の声を届けられるよう、日本語でも出版すべきだと考えるようになった。原著を出版した後、私の考えは、原稿を書いていた当時の「世界中のより多くの読者に、英語で」というものから、「日本の読者に、日本語で」へと変化していった。

第1章

外国語学習動機づけ理論と日本人学習者

本章では、シオンとユズルを対象としたインタビュー調査の内容をよりよく読者に理解してもらえよう、本研究の理論的背景について、特に日本人学習者を念頭に置きながら説明を試みる。具体的には、「外国語学習動機づけ」と呼ばれるこの分野のごく基礎的な内容とともに、特に、本研究の大きなトピックである英語以外の言語（language other than English、以下、LOTE とする）の学習動機づけに焦点を当てて分野の代表的先行研究を紹介し、なぜこの分野で、特に日本人学習者を対象とした実証研究が必要なのかについて考えてみたい。

これまで、既に国内外で広く調査されてきた外国語学習の動機づけではあるが、先行研究には一定の偏りも見られる。広く「外国語学習動機づけ」について考えると、それは対象言語が英語のものが多くという偏りであり、以下で紹介するとおり、動機づけの3側面といわれる“choice”（選択）、“effort”（努力）、“persistence”（粘り強さ）の中で persistence の研究が少ないという偏りである。さらに、「外国語学習動機づけ」の中でも特に「LOTE 学習動機づけ」に絞って考えてみると、それは先行研究の方法論的、理論的、そして地理的偏りである。これらの先行研究の中に本研究を位置づけるならば、本研究は、以下のように特徴づけられる。

1. LOTE を含む複数の言語を学ぶ動機づけを対象としている
2. 学習の継続力を中心課題に据え、persistence を調査している
3. 2 名を対象とした小規模の縦断的ケーススタディである（研究には、ある一時点での様子を 1 回のデータ収集で調べる横断的研究と、複数

第2章

研究デザイン

本章からは、実際のインタビュー調査の詳細を紹介する。「はじめに」でもふれたように、本研究は、2012年6月から2021年3月まで、半構造化インタビュー（下記の「インタビューについて」の説明を参照のこと）を用いて行った縦断的研究である。第3章以降のインタビュー内容をよりよく理解していただけるよう、ここでは、改めてユズルとシオンについての詳細やインタビューの時期、そしてデータ分析の方法などを説明していく。

ユズルとシオンについて

「はじめに」で説明したように、私がユズルとシオンに出会ったのは、彼らが高校2年生の時である。2人は、インタビューに協力してくれた高校生、計13名のうちの2名であり、ユズルが11番目にインタビューした学習者、シオンが12番目にインタビューした学習者であった（それゆえ、博士論文や初期に発表した論文では、ユズルを Interviewee 11、シオンを Interviewee 12と呼んでいた）。

2人には共通点、相違点、両方あった。「はじめに」で紹介したように、2人とも、英語については義務教育で英語を学習し始めるよりもずっと前に、その学習を開始していた点は共通している。また、研究開始前の2011年度、2人が高校1年生のときには、学校主催の中国との交換訪問プログラムに参加したことも共通点である。2人が高校時代に既に中国語学習の経験があったのは、このプログラムがきっかけである。さらにもちろん、2人ともラジオ講座での英語学習経験があることも共通している。一方、2人の大学以降の専攻分野は全く異なっており、それぞれ異なった分野での学習あるいは

第3章

初期の頃

～ラジオ講座での英語学習～

実証研究の出発点

実証研究のスタートとなる本章は、ユズルとシオンが、まだ高校生だった時代についてである。「はじめに」で述べたように、私が2人に会ったきっかけは、ラジオ講座での英語学習経験があり、個別のインタビュー調査に応じてくれる学習者を探していた博士論文である。ここではまず、博士論文のトピックとしてNHKラジオ英語講座での学習を取り上げた背景と、次章以降とは少し研究課題の組み立て方が異なり、2人のみに焦点を当てたわけではないという「異質な」本章の背景を説明したいと思う。

私が博士論文でNHKラジオ講座での学習を取り上げた理由は、「外国語学習動機づけ」というトピックに興味を持ったきっかけが、まさにNHKのラジオ英語講座にあったからである。私は大学学部卒業後、一時期、NHKのラジオ・テレビ講座のディレクターとして働いていたことがあり、そのときに感じたのが、講座番組での学習継続の難しさであった。私自身、学習者としては英語についてはラジオ講座で6年間学習を継続した一方、大学で挑戦してみたスペイン語講座は、ほんの2か月ほどで挫折するという経験があった。学習が継続する人とそうでない人の違いはどこにあるのか。その背景をいろいろと調べていくうちに出会ったトピックが、「外国語学習動機づけ」であった。よって、博士論文では、NHKラジオ英語講座での学習の継続・非継続と、英語学習動機づけの変化の関係性を探ることにした。

この博士論文は、混合法研究（mixed-methods study と言い、質的・量的調査両方を行い、両者から導き出される結果を比べることも含めて多角的に1つの事象を調べようとする方法である）であった。具体的には、まず、

第4章

第二外国語学習の(再)スタート

本章で分析する 2014、2015 年度は、ユズルとシオンが大学生活をスタートした時期である。2014 年度、私の方は既に紹介したように、2 人が高校 2 年生の時の 2 回のインタビューをもって博士論文を終了しており、研究も保留としていた。研究の再開を目指して 2 人に連絡をとったのは 2014 年 7 月で、この時のやりとりで、2 人が 2014 年 3 月に高校を卒業、同年 4 月に同じ大学に入学していたことが明らかになった。この 2014 年度、そして 2015 年度は、2 人が大学 1、2 年生の頃ということで、高校時代よりもさらに、様々な人生経験、あるいは言語学習に関する経験を経た時期にあたる。2 人は厳しい入試を乗り越え、大学生活を楽しむ一方、学業に対するひたむきさは高校時代と変わっておらず、熱心な様子が窺えた。

現在、日本の大学においては、特に 1991 年の大学設置基準大綱化（文部省高等教育局, 1991）以降、第二外国語の授業が必修であったりそうでなかったりするが、シオンとユズルの大学では、第二外国語を 1 つ選択し、学ぶことが必修となっていた（大学設置基準大綱化以降の第二外国語教育の現状については、岩崎, 2007; JACET, 2002, 2003 など参照）。この第二外国語として、2 人とも、高校時代に学んだ中国語とは違う言語を選択しており、具体的には、ユズルはフランス語、シオンはドイツ語を学んでいた。また、ユズルの場合は、自らの興味に基づき、または専門分野の学習・研究に必要ということで、他の LOTE についても熱心に学んでいた。具体的にどのような LOTE を学んでいたかは、後に詳述する。

「はじめに」でも述べたとおり、日本人学習者の外国語学習動機づけの分野において、LOTE に関する研究は非常に限られている。私自身の研究とし

第5章

日本で大学生が外国語を学ぶということ

本章で取り上げる2016年度から2017年度にかけては、シオンとユズルの専門課程における学習、あるいは研究、そして実地研修が大きく発展した期間である。第4章で述べたように、シオンは大学2年時に理系に転向した後、大学3、4年生時は、新しい分野において集中的な学習や病院での実習を経験し、非常に忙しい様子だった。おそらく、病院での実習のみでも非常に忙しいと思われる中、シオンの場合は、それまで彼女が取り組んできた分野とは全く異なる分野での学習で周りに追いつくため、余計に大変だったと思われる。加えて、特に大学4年時には、卒業論文の提出、大学院入試と看護師資格取得の国家試験のための勉強ということで、休む暇もないような印象だった。一方、ユズルはこの期間、大学3年生夏から、奨学金を得て1年間のフランス交換留学を経験。フランス滞在時には、ヨーロッパ各地を旅行する機会もあったようである。帰国してからは、以前にも増してLOTE学習に熱心に取り組んでいる様子であった。

この時期の2人の様子から判断して、大学の専門分野における外国語使用は、特に日本のように、学んでいる言語を話す機会がなかなかないようなFL環境においては、「読む」という行為を通して、日常的に外国語に触れる貴重な機会を提供しているように考えられた。2人とも、専門分野の論文を英語で読むということを日常的に行っていたし、高校時代に英語多読の経験がある2人は、英語で「読む」ということに全く躊躇なく取り組んでいるようであった。加えて、ユズルの場合は、専門分野の文献を様々なLOTEで読むということも日常的にあったようである。外国語使用というと、国内外の学習者の多くは「話す」ことを真っ先に思い浮かべるかもしれないが、大

第6章

人はなぜ言語を学ぶのか

～教育機関における外国語学習を超えて～

本章で分析するのは、研究最後の3年間、すなわち、2018年度から2020年度にかけてである。この3年間は、研究期間中の9年の中でも、特に2人の人生が大きく動いた時期である。2018年度から2020年度の間に、ユズルは大学を卒業、大学院修士課程に入学、そして最後のインタビューを行った2021年3月には修士課程を修了しようとしているところであった。一方のシオンは、2018年3月に大学を卒業後、同年4月に同じく大学院修士課程に入学、2020年3月に修士課程を修了、2020年度には社会人1年目を過ごすという時期であった。このような人生のステージが大きく動いた時期、2人の外国語学習および外国語学習動機づけもまた、大きな動きを見せた。本章では、2人の外国語学習や外国語使用の詳細、動機づけの変遷を、彼らの人生の動きとともに検証し、言語学習に対するヒントを探っていく。

外国語学習動機づけに関する研究について今一度考えてみると、既に何度も紹介している対象言語の偏りに加え、研究対象者の偏りが挙げられる。すなわち、国内のみならず、海外を含めて考えてみても、多くの動機づけ研究の対象者は大学生であり、少数が高校生であったり中学生（あるいは最近では小学校で英語が必修化されたこともあり、最近の研究では小学生も含む）であったりする。一方、大学院生や社会人に関する研究は国内外とも非常に限られている（例外として、例えば Kubota, 2011）。しかし、外国語の学習について一般的に考えてみると、例えば、必ずしも学習者が教育機関に属していないこともありえるし、NHK ラジオ講座のリスナーについて考えてみても、社会人の場合もあったりと、様々な学習者が存在する。研究面においては、このような研究対象者の偏りを是正し、様々な学習者を対象とすること

第7章

人間としての研究者

～原著執筆を決心してから考えたこと～

ユズルの死がもたらしたもの

この研究は、自分にとってはこれまで取り組んできた研究の中で最もやりがいのある、かけがえのないものになった。原著の原稿を書き終えた後は充実感にあふれ、世界中の読者に2人のことを紹介できることが本当にうれしかった。そんな状況の中、原著の外部査読者からのコメントに基づき原稿の修正もほぼ終了していた2022年5月、私はユズルの訃報に接した。

研究協力者が亡くなってしまうということなど、私は全く想像していなかった。ほとんどの研究者が、そのようなことは想像もしないと思う。もし機会があるならば、原著の出版後数年してから、長期間の研究に協力してくれたことに対するシオンとユズルの思いを再度インタビューしてみたいとすら考えていた。協力者が亡くなってしまうことにより、私は、いくつもの壁にぶつかることになった。

やはり一番大きかったのは、自分自身の動揺、悲しみである。「悲しみ」という言葉では、自分が受けた衝撃を十分に言い表せないと感じるほど、心理的に衝撃を受け、悲嘆にくれた。訃報に接してしばらくは、端から見ても心配な状態だったようで、夫には「心ここにあらずの状態通勤途中に事故に遭わないようにね」とまで言われた。最後のインタビューでこんなことも聞いておいたらよかったのではとか、自分にもっと力量があればまた違ったインタビューができていたのではとか、ユズルのような素晴らしい多言語学習者にはもう一生出会えないのではとか、様々な思いが頭をよぎった。ユズルが亡くなってから1年経った今でも、いろいろなことを考える。

また、実際的な問題として、研究の世界では、研究への協力に対する同意

第8章

結び

～2人の多言語学習者が教えてくれたこと～

外国語学習動機づけの長期的な変化を探ることを目的として、9年の間、ユズルとシオンの人生の一部にインタビュー調査という形で関わらせてもらったわけであるが、本研究で語られた内容は、彼らの人生のほんの一部にしかすぎない。それにもかかわらず、2人は、多言語学習の動機づけ研究に十二分な材料を提供してくれた。また、研究という枠を超えて、私自身にも、人間にとって言語とは、言語学習とは何かを考えるきっかけをくれた。さらに、ユズルが亡くなるという、研究開始当初には全く予想していなかった衝撃的な出来事を通して、私は、「省察性」や研究における「感情」という新しいトピックについて学び、考察することになった。偶然にも彼らの人生のほんの一部であるにせよ関わらせてもらったことが、研究者として、あるいは人間として、今となっては私の宝である。

結びとなる本章では、第3章から第6章で分析したインタビュー結果を少し俯瞰して考察し、2人の長期的動機づけの変化をまとめる。第3章から第6章では、それぞれが高校時代、大学時代前半、大学時代後半、大学院・社会人時代と、異なる段階でのシオンとユズルの様子を、それぞれ異なる研究課題を設定して分析した。これらの研究課題は、全体としては「長期的に動機づけはどのように変化するのか」という大きな研究課題でつながっており、本章で試みるのは、その大きな研究課題に取り組むことである。そしてそこから、理論的、教育的示唆を考察する。例外的に優秀とも言えるユズルとシオンではあるが、彼らの様子から、我々言語学習者、あるいは教育者が参考にできる点は多い。また、今後の研究のヒントになる点もいくつかある。ここではそれらについて、9年間の2人の様子とともに今一度考えてみ